

平成 28 年 3 月 1 日

## 京口門だより No. 29

例年どおり花粉症の季節になってきました。その言葉を聞くだけで鼻がムズムズしたり、眼が痒くなったりするというような人もいます。いままでそんなアレルギー反応は全くなかったという人でも、ある時から急に起こってきたという人もあります。花粉症についてはすでに1 昨年このたよりで触れました。効果のある漢方薬があることも申し上げました。

今回はこのような鼻アレルギーやアレルギー性鼻炎(通年性のもの)とも関わりのある副鼻腔炎について話します。副鼻腔炎の原因は主にウィルスや細菌による炎症ですが、最近はアレルギーによるものも多くみられます。副鼻腔というのは、両眼の上の額の奥にある前頭洞、鼻の両側上部にある篩骨蜂巢(しこつほうそう)、上顎の鼻下方にある上顎洞などと呼ばれる、空気のはいった粘膜に覆われた空洞などがあります。一体何のためにあるのか、これだけ医学が進んでいるのに、不思議なことにいまだその理由が解らないままです。にもかかわらず風邪をひいた後などに、副鼻腔炎は頻繁に起こる病気です。副鼻腔の粘膜に炎症を起こして、膿や粘液がたまって鼻の奥から咽にかけて鼻汁がおりてきます。これを後鼻漏(こうびろう)とよびます。慢性の副鼻腔炎でも細菌によって起こるものは、昔は蓄膿症といっていました。黄色い粘い鼻漏が降りてきます。そのほか鼻がつまり、頭重感や頭痛も起りやすくなります。臭いが分からなくなることもありますし、副鼻腔炎のために集中力を欠いたり、イライラしたりで、生活の質を低下させることもあります。

今日の医学では抗アレルギー剤や抗生物質を服用する方法と手術療法があります。長期間抗生物質を飲んで身体に変調をきたす人もいます、それだけでは充分治らない場合もあります。手術療法ですっかり良くなる人もありますが、何度も手術をして治らないという例も見受けます。

漢方ではどうかと言いますと、炎症を治す柴胡剤や頭痛や肩こりを治す葛根の入った薬を併せて用いますと、意外にすぐれた効果をしめします。長くこじれた副鼻腔炎に到る前に、早めに漢方治療をお勧めします。また副鼻腔—気管支症候群といって、副鼻腔炎と慢性気管支炎や気管支拡張症を併発して難治性となることもあり、注意が必要です。

